

INDEX

- 1 メッセージ：ネットと反モルモン
- 2 高橋弘のモルモン人物伝(3) ポール・トスカーノ
- 3 投稿：宣教師との縁の切り方 jan
- 4 リアホナを斬る：(第3回) 木塚灯八
- 5 モルモンQ&A：「神殿に入るかどうか悩んでいます」
- 6 ニュース

わたしたちの活動と自己紹介ページはこちら
<http://www5e.biglobe.ne.jp/~iemnet/htm/about.htm>

～ ご購読ありがとうございます ～

ネットと反モルモン るう@大喜多秀起

「反モルモンのインターネットサイトにはアクセスしないように」
毎度おなじみの勧告が出されている。モルモン教団にとってはいまやインターネットは躓きの元である。「反モルモンの提供する情報はすべてが偽りであり、悪意に満ちていて極めて有害である」。いくら口をすっぱくしても会員からのアクセスが減る事はない。むしろ、反モルモンサイトのコンテンツを読み、BBSをROMしながらも、神殿参入したり、指導的立場に召されたりしているモルモンがいるのである。会員と反モルモンとの交流を厳しく禁じながら、現実には制限できていないのである。

その一方特にネット上で、モルモン教の不利益な情報を提供するものはなんでもまとめて反モルモンと言うヒステリックな雰囲気が生まれているのも事実である。彼らにとっては「反モルモン」と言うのは「バカ」と同様な罵倒語となっている感がある。

大体からしてモルモンにとって反モルモンとは何なのかという定義さえも曖昧だ。脱会者がすべて反モルモンではない。一方的に反モルモンのレッテルを貼られ困惑している方、ましてや現役教会員でありながら反モルモン呼ばわりされている方さえいるのである。

勇気と真実の会公式サイトの「反モルモンとは？」の項で反モルモンを「積極的にモルモン教のカルト性を認め、同教団に対して明確な反対の意思を示し、教団の活動を抑制して行く意思を持つもの」と一定の定義づけを行った。反モルモンとは反カルト活動の一端に属する者なのである。反モルモンと言う言葉を誹謗中傷の言葉として使用する事は全く正しくない。

言葉を正しく定義する事は理性的に物事を考え、議論するためには不可欠である。ところがモルモン教徒は理性的思考ができなくなっている。それが出来れば、矛盾だらけのモルモン教義にも気がつかないわけがないのだ。皮肉な事に自らの敵とは何かを考えること自体が、既にモルモン信仰の危機になってしまふ。これは大変なジレンマをはらんでいる。言葉の定義を曖昧なままにしておく方が信仰を保全するためには都合が良い。気に入らない相手は「反モルモン」と切り捨てれば良い。それ以上はなにも考えずに済むのだ。

しかし、その一方で人間というものには知的欲求をもっていて、それが絶える事は無い。モルモン教徒にしてもそうである。今後も反モルモンのサイトへのアクセスは耐える事はないだろうし、益々増加して行くだろう。燭台の灯を隠す事は出来ないのである。

高橋弘のモルモン人物伝(3) ポール・トスカーノ

ポール・トスカーノは弁護士で、ユタ地区の破産に関する公的機関の常任理事の一人。その知性と有能さで広く知られた人物。かつては教団の雑誌「エンザイン」の編集委員。数冊の本を出版しているが、The Sanctity of Dissent(「高潔なる反対者」)、夫人のマーガレット(ユタ大学古典学助教授)との共著Strangers in Paradox: Explorations in Mormon Theology(「モルモン神学の搾取」)が有名。トスカーノは、女性の権利擁護のための活動が教団幹部の逆鱗に触れ、度重なるハラズメントを受け、破門される。同様に夫人であるマーガレット・トスカーノもフミニズム運動のゆえに破門になる。夫婦で破門を経験した初めてのカップルである。

今回は「セプテナー・シックス」として知られている1993年9月、教団を破門になった6人の人物の中からトスカーノを代表として取り上げ、破門の経緯を簡潔に述べる。この事件は「ニューヨーク・タイムズ」の一面を飾り、全米から注目されたモルモン教団の事件であった。問題として浮上するのはモルモン教団の過度の保守化傾向と、破綻寸前のカルト宗教の現実から目を背け外側のイメージにこだわる教団幹部の姿である。時代に即応した新しい方針を打ち出す気力がなく、旧体制という沈没寸前の船にしがみついたアルツハイマー的、超保守的な教団幹部たち、すなわち故ハロルド・ビー・リー大管長、故エズラ・タフツ・ベンソン大管長、故使徒ブルース・マコンキー、故使徒マー

る大管長ヒンクリー、副管長ジェームズ・ファウスト、使徒ボイド・パッカー、使徒ダリン・オークス、使徒ラッセル・ネルソン、使徒ラッセル・バラード等である。現在は極端に右寄りになっているから、教団幹部は一部例外を除いて殆どが保守的と考えられる。まるでチェニーやラムスフェルドといったネオコンを揃えたブッシュ政権を見ている気分になる。ブッシュ政権がその下にCIAや各省庁をコントロールしているように、モルモン教団もその下に中堅幹部や各ステークヤワードの指導者を支配下に置いている。しかも秘密のスパイ組織「教会強化委員会」という諜報機関を持っており、その直接の指揮を執っているのがファウストやオークス、ネルソンといった教団トップである。

前回紹介したスターリング・マクマリンは黒人の処遇をめぐる教団と対立したが、ポール・トスカーノは早い時期からフェミニズム擁護のために立ち上がった知識人の一人で、そのため教団との最も激しい葛藤を経験するはめになった。彼は一九七六年にはすでに教団の雑誌「エンザイン」のブラックリストに載り、執筆禁止という制裁を受けている。七九年には教団の指導的地位から外され、その頃から度々教団幹部からの呼び出しを受け、フェミニズム活動から手を引くよう脅迫され嫌がらせを受けていた。八四年には教団のコンピューターの彼のファイルには「要注意人物」としてマークされていることが発覚した。九二年、モルモン教団は以前から諜報活動をしており、教団が問題視する信徒についてもブラックリスト(秘密ファイル)を作り、教団の地方幹部や専門のスパイを雇い、一人ひとりの活動を監視していたことが発覚した(後述)。同年六月、教団からの度重なる脅迫を憂慮し、精神的虐待を記録し場合によっては行動をおこすための「モルモン・アライアンス」(Mormon Alliance)が、ポール・トスカーノ等の主催により結成され、最初の集会が開かれた。その集会にて「精神的虐待とは、信徒に損害・損傷をあたえ、指導者の利益に奉仕するための、教団指導者による継続的な権力行使」と定義された。同年九月、弁護士ポール・トスカーノは他の五人の知識人とともに破門された。

この破門には教団幹部、とくにボイド・パッカー、ダリン・オークス、ラッセル・バラードが(さらにスパイ組織「教会強化委員会」の指揮を執っていたジェームズ・ファウスト、現副管長)の4人の使徒が深く関与していたことが知られている。教団幹部が一般信徒の事柄には決して関わらないという公的表明をよそに、ばれないように密かに行動していたわけで、結局はそれが明らかになったとき、今度は罪のなすりあいをはじめている。ベンソンの孫の劇作家スティヴ・ベンソンもこの事件に利用されそうになったと「アリゾナ・リパブリック」紙に述べていた。この事件とはポール・トスカーノに対する種々のいやがらせや脅迫のことである。そしてスティヴ・ベンソンがここで述べている最高幹部とは使徒ダリン・オークスのことである。

私たちはまた、モルモン教会の最高幹部が、いとも簡単に嘘をつくことを、少なくとも本来そうあってはならないはずの地方教会の信徒にたいする指導・干渉に、くり返し深くかかわってきたという事実をひた隠しに隠すということ、とても大目にみることができなかった。モルモンの使徒たちは、こういう干渉にかかわった事実を個人としては認めつつも、彼らの立場を護りたい一心で、突然その態度をひるがえし、公的な場ではそれを否定するという具合であった。その嘘がばれそうになったとき、彼らが私たちに助けを求めてきたときには、仰天したほどである。

トスカーノがもっとも憂慮しているのは、教団幹部たちの傲慢さと精神的レベルの低さである。その一例がベンソン大管長時代の使徒ブルース・マコンキーである。1982年、マコンキーはBYUのアッセンブリーで数千人の学生を前に、「イエス・キリストを礼拝してはならない、またイエス・キリストとの個人的な関係を求めてもならない」とトンデモ発言をした。キリストではなく我々教団幹部に従えという主張である。マコンキーは教団指導者の本音を吐露したわけだ。驚いたことに教団幹部は誰一人これに異議を差し挟まなかったという。それを問題にすることは外部に教団の不一致を印象付け、恥をかくことを恐れたからだ。イエス・キリストを主であると告白することより、恥を晒さないことのほうが重大事だったのである。このマコンキーの発言はその後も教団のなかで論駁されなかった。野放しの権力が、教団幹部をして自らの権威は福音より上で、福音こそ地上の権威によって制約されるのだと信じ込ませたらしい。この延長線上に「神の愛は無制約ではない」(つまり、条件付だ)という使徒ラッセル・ネルソンの主張がある(「エンザイン」2003年2月号)とトスカーノは言う。神の愛は無条件であり誰の上にも注がれる、という福音のメッセージを教団は勝手に制約する。それは教団幹部が不遜にも、モルモン教団がキリストの福音よりも上だと自惚れているからである。こういう主張は、オウムや統一協会と同様、まさにカルト宗教の主張である。どんなにキリスト教の衣をまとっても、モルモン教がカルトであることは明白である。

人間的権威と栄誉をそれほどまでに追い求める世俗的な教団幹部の姿は醜悪以外の何ものでもない。こんなに不信仰で傲慢な人間が一つの教団を支配していることが、信徒にとっては不幸のものである。これは信徒がどうのこうのと言う遙か以前の問題であって、そこに見えるのはただ頑迷で醜いだけの欲深い老人の姿である。トスカーノを含めた「セプテンバー・シックス」の経験とは、そうした事実を白日の下に晒した事件だったということである。

参考文献

Toscano, Paul James. The Sanctity of Dissent. Salt Lake City: Signature Books, 1994.
Paul James Toscano, "A Plea to the Leadership of the Church:"

Paul James Toscano, "Dealing With Spiritual Abuse: the Role Of The Mormon Alliance,"

Paul James Toscano, "An Interview with Myself,"
SUNSTONE, Dec. 2003

Lavina Fielding Anderson, "The Church and Scholar,"
SUNSTONE, July 2003

THE SALT LAKE TRIBUNE, February 22, 1997

高橋弘「宗教と知識人」『人文科学研究』国際基督教大学、1997年、他

投稿 宣教師との縁の切り方 jan

最近、反モルモンの掲示板に、道で声をかけられた宣教師に自分の住所、氏名、電話番号を教えてしまった。また、レッスンを勧められたといった相談がよく書き込まれます。そしてその相談をされた複数の方がこの先、何がおこるかわからないことに対して恐怖を感じておられるようで、最近まで教会員であったわたしとしては、「何もそこまで怖がることはないのに」と、つい思ってしまいます。しかし、その方々の立場になって考えると、こういうことはおそらく初めての経験だろうし、また多くの宗教問題が叫ばれている昨今、不安になる気持ちもわからないでもありません。そこでモルモンの宣教師に対しては、きちんとした対応さえすれば、何も怖がることはないということをお伝えしたくて、今回の投稿に至りました。

さて、去年のことだったと思いますが、ある女性から同じような相談を受けました。道で宣教師から声をかけられ、勧められるまま無料英会話に通ったのですが、そのうち、レッスンも勧められるようになり、断りたいのだがどうしていいのかわからないということでした。彼女もまた、度重なる宣教師のアポなし訪問やしつこい電話に恐怖を感じておられたのです。しかし、彼女の場合、一番問題だったのは、そんな時にきちんと対応せずに、居留守を使っていたということです。宣教師としては何度訪問しても、電話しても連絡がとれないので、仕方なくまた出直すこととなります。また彼女にしてみれば、何度でもしつこく訪問や電話をかけてくる宣教師にもはや恐怖を感じており、その度に居留守を使い、彼らが諦めてくれるのをじっと待つといった感じでした。そしてこの悪循環が数ヶ月に及んでいることを知った時にはわたしは愕然としました。宣教師にしてみれば、ただ会って話しをしたいだけで、何度も来て嫌がらせをするという意図は全くないのです。

わたしはこれはお互いにとって大変不幸なことだと思いました。そこでわたしが彼女に代わって直接宣教師に連絡をとって断ることにしたのです。その時の彼女の喜びようは大変大きく、それから何度も感謝のメールをいただきました。それほど彼女は困っておられたのでしょうか。

ここで皆さんにお願いしたいのは、居留守などを使ってうやむやにせず、きちんと断っていただきたいということなのです。きちんと断っていただければ、彼らだってストーカーではないので嫌がらせのようにしつこくされることはまずありません。（たまに熱心さのあまり、しつこいと感じる宣教師も中にはいますが）

また、どうやって断るかで悩む方もおられることでしょう。その時は「興味がない」というのが一番便利で確実だと思います。中には宗教談義で断る方もおられますが、その時には彼らに打ち勝つだけの理論武装が必要になります。また「祈ってください」と「それはサタンの情報です」というような信仰論に持ち込まれると、もはや常識的な話ではできなくなります。「宗教（またはモルモン）には興味がないのでお断りします。」またある期間、宣教師と親しくしていたなら「もう興味なくなってきたからお断りします。」で良いと思います。時々、教会の活動に誘われた時に、「都合が悪いから。」「忙しいから。」と言って断る方がおられますが、これは止めた方がいいでしょう。というのは、これは日本人とアメリカ人の文化の違いだと思うのですが、日本人の宣教師だと、あなたの態度や雰囲気から、気持ちを察してくれるのですが、これがアメリカ人宣教師だと「では、また別の機会に誘ってみよう」と考え、また再び誘われることとなります。

ですから、宣教師に対して断る時には、はっきりと自分の意志を伝えるようにしてください。アメリカ人宣教師には「宗教（またはモルモン）には興味がないので、訪問も電話もお断りします」と言ってみてはどうでしょうか。時々、無碍（むげ）に断るのも気の毒、と思う心優しい方もおられますが、彼らはいつも断られているのでその点は大丈夫です。むしろきちんと断ってもらった方が彼らにとって新しい見込み客を探すことに専念できますから、そちらの方がいいのです。（宣教師というよりもセールスマンみたいですが...）

それから、宗教は断りたいが、宣教師とはこれからも変わらずにお付き合いしたいという方も中にはおられることでしょう。確かに彼らは親切で真面目で良い人たちです。しかし、彼らの活動はあくまでも伝道を目的としたものですので、宗教を断るということは、同時に彼らとの付き合いも終わるということの意味します。一抹の寂しさも感じるとは思いますが、お互いのためにはそれが一番よいと思います。

さて、一口に断ると言ってもさまざまです。何か困ったことがあった時には遠慮なく相談してほしいと思います。例えば、「きちんと断ったはずなのに、暫くして別の宣教師が訪問してきた」ということも時々あることもあります。というのは、常識で考えれば、あなたが断った時点でああなたの個人情報

新たに転勤してきた宣教師があなたの情報を見つけ、また再度訪問してくるというケースです。(こういうやり方にはモルモン教会側に猛省を促し、改善を要求します)こうなったら、訪問してくる度に根気よく断り、ファイルから自分の個人情報削除してもらつぽかありません。

一番いいのは、まずは突然道で声をかけてきたり、訪問してくるような知らない人には自分の個人情報を絶対に教えないということです。これはモルモンの宣教師に限らず、防犯上の面から考えると、とても大切なことですね。

連載 リアホナを斬る (第3回) 木塚灯八
2004年10月号 大管長メッセージ「子供を教える」

今回は届いたばかりのリアホナ2004年10月号からモンソン副管長による大管長会メッセージを考えてみたいと思います。このタイトルは「子供を教える」ということですが、メッセージの最初にはイエスの少年時代の逸話が挙げられています。ヨセフとマリアが行方がわからなくなったイエスを探し出すと、神殿で教師達のまん中で説教していたという新約聖書の有名な逸話です。しかし子供を教えるというテーマなのに、初っ端から子供に大人が教えられるという不適切な逸話を語りだすモンソン氏の思考回路は大丈夫かと心配になります。タルメージの「基督イエス」によればイエスは少年時代、霊的な事柄はヨセフからは何一つ学ばず、天使が直接イエスを教えたと言うのがモルモン教義なのです。なので、子供を教えると言うテーマでイエスの少年時代を持ち出すのは勘違いも甚だしいと言えるのですが。

さてモルモン幹部の説教でお馴染みのパターンですが、重要な原則だという箇条書き項目を3つ、4つ示してこれらについて考えてみなさいというのが今回のモンソン氏の説教です。その項目とは、

1. 祈ることを教える
2. 信仰を鼓舞する
3. 真理に従って生きる
4. 神を敬う

だそうです。

第1は祈りを教えることだ、子供に祈ることを教えてくださいとモンソン氏は言うのですが、思い返して見ると私は、モンソン氏が自分の祈りの経験を語ったのを読んだ記憶が無いのです。これは本当の宗教者なら重要なテーマだと思うのですがモンソン氏は祈りについては実にあっさりと言語が終わってしまいます。

第2の項目は「信仰を鼓舞する」というモルモンでは良く使う表現です。ここでふと考えてのですが、そもそも「信仰」とは「鼓舞」するものなのでしょうか？モルモンでは信仰が強くなる、弱くなるとも言いますが、つまりモルモンが信者に与えている「信仰」と呼ばれるものは、鼓舞されて、つまり他人にはやし立てられて強くなったり弱くなったりするものなのです。それは本当に神への「信仰」なのでしょう？ただの思い込みではないのでしょうか？これは良く考えてみる必要があると思います。

第3の項目「真理に従って生きる」もモルモンでよく使う表現ですが、言葉の意味そのものを良く考えてみると実におかしいです。「真理」は従うものではありません。真理は真理であり、誰がなんと言おうと真理なのだから、従うも従わないもないはず。しかしモルモン教会がこの言葉から何を伝えたいのかをモルモン会員は知っています。モルモン教会の教えること(=真理)に従って行動せよ、と言う意味です。宗教的な言い回しで置き換えています、実は教会組織への服従を求めているのです。

ここでモンソン氏が取り上げた一つの話を紹介します。故アンダーセン長老の息子が土曜日の学校のパーティに父親の車を借りて出かけ、帰りには必ずガソリンを入れて置くように言われたが、すっかり忘れてしまった。次の日曜日父親のアンダーセン長老はガソリンを買うことなどせず遠い道のりを教会まで歩いて出かけたという話です。モンソン氏は安息日を守るという模範を示した立派な父親を褒め称えています。しかし、歩いて遠い道のりといってもいったいどれ程の距離があるのでしょうか？ソルトレークは数ブロックごとに教会堂があるとモルモン会員が自慢している街です。さらに指摘すればガソリンを買わなかったのではなく、買えなかったではありませんか？モルモンの幹部が日曜日にガソリンを買ったなんて知られたら大恥をかきます。

そんな状況での行為を安息日を守ったなどと称えても、接待ゴルフで優勝したこと自慢話以上に醜態です。しかし自慢するだけならまだ良いですがこんな話を模範にして、一般会員には安息日に働く仕事には就くとか、転職せよと迫ってくるモルモン指導者がいるのですからたまったものではありません。

しかしその次に紹介する話はさらに輪をかけて酷いものです。モンソン氏の孫ジェフリーが6歳のとき、ある日友達と2人で散歩に出かけ突然見知らぬ家に立ち寄って「僕達は訪問教師です」と上がりこみ、「なにかお菓子はありますか」と平気でのたまつたそうです。モンソン氏によるとその家では楽しい話らしいの時を過ごしたそうで、この家庭はわらべに導かれるという言葉思い起こしたであろうとモンソン氏は自身たっぷりに語っています。

ここまで来ると子煩悩とか親馬鹿を通り越して狂っているとしか言いようがありません。いったい何が「子供を教える」なのでしょう？子供を教えることが全くできていない馬鹿親の見本を全世界に晒しているだけです。

私は今回のメッセージを読んで、「老いて愚かで、もはや、いさめをいれることを知らない王」(伝道の書4章13節)という言葉がこれほど似つかわし

モルモンQ & A 「神殿に入るかどうか悩んでいます」

Q：バプテスマを受けて1年程経過した女性です。

監督さんから「教会へ入られてから1年になりますね。神殿に参入してもっと貴方の信仰を育てたくはないですか？入れば祝福もたくさんありますよ」と言われました。現在、神殿へ参入するためのセミナーで学んでいます。ところが、教会員に神殿の事を聞くと決まって「それは神聖なので口外できません！」との返事です。しかも神殿で儀式（秘密らしい）を受けないと昇栄ができないとも聞きました。教会に入る時に、そのような話が一切無かったので、不安を感じ、正直なところ、神殿に入るべきなのか迷っています。

A：キリスト教会にはモルモン教の「神殿」も秘密の儀式もありません。モルモン教の神殿は聖書に書かれた神殿とは一切関係が無く、モルモンがフリーメイソンをまねて作り上げたものなのです。儀式の数々もキリスト教風を装う、まったく歴史的に根拠が無い魔術的でカルト宗教特有のものです。神殿内の儀式については、下記のHPがとても詳しく載せていますのでぜひご参照してください。（但し、このサイトは現在工事中です）

<http://www.1dstemple.jp/>

神殿には指導者の面接をクリアした教会員だけが入ることを許されます。その面接内容の一部を紹介します。

- 1) 毎週欠かさず教会のすべての集会（特に聖餐会）に出席しているか。
 - 2) 正直に什分の一（他に断食献金など）を納めているか。
 - 3) モルモン教会に反対する活動や組織（反モルモン・共産党の支持など）と関係がないか。
 - 4) モルモン教会の指導者（神権者）を支持しているか。
 - 5) 純潔の律法に违背（不純性交・自慰行為・同性愛など）していないか。
 - 6) 他の教会員との間に争いがないか。
- ・・・などです。

収入に関してもそうですが、5項の純潔に関する質問はプライベートな部分に立ち上がったことであり、明らかに「プライバシーの侵害」です。

それから、神殿に入ると、神殿内の儀式の詳細を「絶対に口外しない」との誓約を交わします。口外すれば命を獲られても良い、また、背教すると永遠に地獄に投げ込まれることを誓います。これら内容は事前には一切知らされない秘密です。人は最初は教わるとおりに「幸せや祝福」を望んで神殿に入りますが、実際には恐怖心を植えつけられ、教会に拘束されることとなります。神殿儀式はまさにモルモン教がカルトと言われる所以のひとつなのです。

ニュース

BBSアナホリなどで議論のあったとおり、モルモン教会員である糸数慶子氏が前回の参院選挙に当選しました。モルモンの教義と政治姿勢について、公開質問状を送り、議員から回答を得ました。近々、公式サイトにアップする予定です。現在、送付した公開質問状の内容を公式サイトにて掲載しています。

<http://www5e.biglobe.ne.jp/~jemnet/htm/situmonjo.htm>

「素顔のモルモン教」の再版が正式に決定しました。11月中旬を目途に、当会でも取り扱いをさせて頂く予定です。当会から購入されると、別冊CD-ROMの特典付きです。詳細が決定次第、公式サイトにてお知らせいたします。

勇気と真実の会は会員募集中です。
詳しくは当会へお問い合わせください。

投稿記事募集

脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。

文章はプレーンテキストで作成してください。

メールマガジンバックナンバー（創刊第1号）はこちら

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/cgi-bin/SD/view.cgi?0009211+mail2>

メールマガジンバックナンバー（創刊第2号）はこちら

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/cgi-bin/SD/view.cgi?0009211+mail1>

メールマガジンの購読申し込みはこちら

http://www5e.biglobe.ne.jp/~jemnet/htm/biglobe_mailmag.htm

・メールアドレス jemnet@mrc.biglobe.ne.jp

Copyright(c)1999.JEMNet. All Rights Reserved.
無断での転載・転写・複写・転送などは禁じます。
転載・複写の際は、事前に発行者へご連絡ください。

【解除はこちら】

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

このめるまがはお客様からのご登録に基づき、カプライトより配信されました。